

Title	英語科教職課程での取り組み：円滑に教職生活をスタートさせるために
Author(s)	東, 仁美
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :17-21
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5435
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

英語科教職課程での取り組み -円滑に教職生活をスタートさせるために-

東 仁美

1. はじめに

聖学院大学人文学部欧米文化学科には中高英語科教職課程が設置されており、過去10年間の教職課程履修者は総数79名で、現在そのうち16名が教職に就いている（臨時任用を含む）。1学年10名前後の小規模な課程であるが、4年間を通して英語学習の支援から教員採用選考試験対策まで丁寧な指導を続けている。本稿では、教職課程最後の履修科目である教職実践演習での学科の取り組みを報告する。

2. 教職実践演習の導入

2006年、中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において教職課程での教職実践演習の新設と必修化が提案された。答申では、「教員として最小限必要な資質能力の全体について、教職課程の履修を通じて、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認することが必要である」（中央教育審議会、2006）としている。

その後、2009年の「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」により、教職実践演習は2010年度入学者から必修となり、今年度は実施3年目になる。教員として必要な資質能力を確認するため、教職実践演習の授業には以下の4事項を含めることが求められている。

- ①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- ②社会性や対人関係能力に関する事項
- ③幼児児童生徒理解や学級運営等に関する事項
- ④教科・保育内容等の指導力に関する事項

（中央教育審議会、2006）

3. 先行研究

教職実践演習の開講は前述のように2010年度入学者からが対象となるが、中央教育審議会答申後、

国公立教員養成大学を中心にその必修化に向けて試行段階の取り組みがなされてきた。

上越教育大学では2007年度から教職実践演習の試行を始め、翌年には「上越教育大学スタンダード」を公表し、本科目の到達目標を提示した。2011年度には学校現場を経験していない大学教員でも授業が担当できるよう、「授業シナリオ」を作成し、必修化後の開講講座の拡大に備えた（津野、2012）。

北海道大学では、教職実践演習の必修化に先駆けて、2009年度から卒業生で初任期にある教員の追跡調査を実施している。調査の結果、北海道内の高等学校教員として採用された卒業生の多くが、へき地・離島の小規模高等学校に勤務していることがわかった。この調査結果を踏まえ、北海道大学では、2010年度から定時制・夜間部の高等学校の見学実習を柱として本科目の授業を構成した（梅津・近藤、2014）。

神田外語大学では、初任教員のニーズ調査を実施し、効果的なカリキュラム開発の検討材料とした。千葉県総合教育センターが行う初任者研修に参加する教員を対象としたこの調査では、中央教育審議会答申が教職実践演習の科目内容として例示したものを9つの内容にまとめ、その項目ごとに、大学で教育実習後に学んでおきたかったかを5件法で回答させている。調査の結果、模擬授業・学習指導案・学級集団の3項目でのニーズが高いことがわかった（武田他、2013）。

このように、新たに導入された教職実践演習のカリキュラム開発に際して、教職課程を有する大学が地域の実態や大学の实情に合わせて必修化前から試行錯誤をしてきたことがうかがわれる。本科目の必修化により、大学がその趣旨やねらいを生かしているか、また教職課程の学生が教員としての必要な資質能力を身に付けているかを確認しているかが今まで以上に問われているのである。

4. 本学における教職実践演習（中等）の授業内容

中央教育審議会答申（2006）によると、教職実践演習の授業方法については、グループ討議・事例研究・現地調査・模擬授業・ロールプレイング等を取り入れることが適当である、とされている。また指導教員については、教職に関する科目と教科に関する科目の担当教員が、共同して科目の実施をすることが求められている。この科目の履修を通して、教員になる上で何が課題であるかを学生が自覚し、不足している指導技術や知識を補うことが期待されている。

本学では、4年次秋学期に中高教職課程合同で教職実践演習の授業を開講している。

前半の授業では、教職に関する科目を担当する教員が教師の仕事について3回の講義を行い、その後上尾市立中学校の協力を得て、学校現場での実務実習を行っている。

実務実習においては、教職に対する理解を深めるために、教員の仕事内容をより深くより広く経験することをねらいとした。学生は、上尾市内の中学校1校に2～3名ずつ配属され、授業や学級活動の補助を行った。また取得予定免許教科とは異なる教科の授業や特別支援学級での授業見学の機会も得た。

なお、実務実習にあたっては、本科目担当の教員4名が実習校への巡回指導を分担し、全実習校を訪問した。実務実習では、3日間実習記録簿に実習記録を記入することを課し、「時間割・活動内容」「観察・特記事項」の項目ごとに記録を残した。最終日には実習校の指導教諭にも助言・講評の記入をお願いした。以下は実習記録簿の「実習で学んだこと」からの抜粋である。

「実務実習では、自分の専門科目だけでなく、国語や理科の授業も見学する機会を設けていただき、自分が学んできた専門教科の教育法や授業形式とは別の角度から授業を組み立てることの重要性に

も気づかされました。」

「教育実習では私自身、授業を行うだけで精いっぱいなところがあり、授業準備ばかりになっていました。しかし、今回の実務実習では授業以外の先生方の仕事を知り、また実際に経験させていただけました。（中略）また、掲示物など教育実習ではあまり考えなかったことでしたが、今回教室の掲示の仕事もやらせていただき、掲示物の必要性についても考えることができました。」

実習記録簿の記載内容から、実務実習では特に生徒理解や学級運営等に関する学びが深かったことが観察される。

後半5回の授業は学科別指導とし、履修カルテを元にした教科指導の基礎的知見の確認、教科指導の最新情報の講義やグループ討議、模擬授業の実践、現職教員の講演を授業内容とした。2014年度は、英語科教職課程での3回の授業で現職の英語科教員を招いて実技指導・事例研究・グループ討議の機会を持った。英語が専門の公立中学校校長、県立高校外国語科の英語科教員、本学科卒業生の教員3名というバックグラウンドが異なる教員による3回の授業は教職課程を履修する学生たちが自らの課題を自覚するよい機会となった。

5. 現職教員との交流

教職実践演習の授業方法に関して、「大学教員だけでなく小・中・高の現職教員や教職経験者を有する地域住民や保護者等の人材を登用しながら、従来の一方向的な講義式授業から転換することが要求されている」と石田・白井（2011：28）は指摘している。

以下、本科目で現職教員を招いて行った3回の授業内容について報告する。

5.1 指導計画の作成について

東京都の公立中学校校長（英語科）による授業では、事前に指導案を作成し、授業当日に提出する課題が出された。授業では英語科教員としての

心構え、指導計画の立て方、指導案の作成、アクティビティーの要点などについて講義があり、その後模擬授業を行った。以下、学生の感想である。

「今日の講義を受けて改めて教師が生徒に対して行う授業の質の大切さが分かりました。教師が生徒の意欲を高める授業作りのポイントやアドバイスは、今後の自分の課題でもあり、これからも試行錯誤して取り組んでいきたいと思いました。また、ゲームのことにしてもこれまで自分は楽しさを重視してしまうような組み立て方をしていたので、講師の先生がお話くださった注意点や要点は今後のゲーム作りやゲームの進め方にとっても参考になりました。先生が最初の講義でおっしゃっていた『寝ている生徒を注意するのではなく、寝ることがないように授業をする』教師になれるよう頑張っていきたいです。」



5.2 音読、暗誦の指導

埼玉県の公立高校英語科教員による授業では、音読、英語暗誦の指導方法を学んだ。英語のリズムやイントネーションについての説明の後、参加者全員で実際に声に出して音読練習をした。その後、グループに分かれて、スティーブ・ジョブズのスタンフォード大学でのスピーチを暗誦し、グループ発表をした。演習形式の授業を通して、学生たちは音声指導に対する知識や指導力の不足を痛感したようである。以下、学生の感想である。

「今回の講義で、英語独特のテンポや強勢などを

意識しながら声に出すことができました。完全に身につけるまでは至りませんでしたが、授業の中で何度も取り入れることにより英語独特の発音に慣れることができるのではないかと感じました。また、先生のモデルがしっかりした物であることが大切だと感じました。」

5.3 学科卒業生との座談会

最終回は欧米文化学科を卒業して、教員になった3名の先輩と学生との座談会を企画した（3名はそれぞれ私立高校教員、さいたま市中学校教員、東京都中学校教員）。座談会では、①授業以外の仕事 ②生徒指導 ③部活指導 ④教師の仕事の魅力という4つのテーマについて、まず現職教員の話聞き、その後質疑応答という形式で進めた。以前にも教職講演会で話を聞いたことがある先輩や1学年上で模擬授業をよく見てもらっていた先輩が参加してくれたため、4年生も遠慮せず質問や意見を述べることができた。以下、学生の感想である。

「今回、先輩方の話をうかがって、先生という仕事がどれだけ重要であるかを学ぶことができました。教育実習では授業作りが主であり、教職実践演習での実務実習では授業以外の実務を経験しました。今日の先輩方のお話で、授業だけではなく、校務分掌やクラブ活動の指導など、教師の仕事がいかにも多忙なのかよくわかりました。貴重なお話をしていただき、ありがとうございます。」

3回の授業を通して、英語科教師の仕事の全体像をつかむことができ、4月から教職に就く学生にとっては日々の業務がより具体的にイメージできるようになったことが感じられる。現職教員の人材登用は今年度初めての試みであったが、授業のねらいとしていた「教科等の指導力に関する事項」以外にも生徒理解や学級運営、社会性や対人関係能力、使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項も結果的には含むことができ、非常に内容の濃い授業となった。



6. 今後の課題

教職実践演習は導入されてまだ2年しか経っていない。本学科の教職課程でもいかにすれば教員志望の学生が円滑に教職生活をスタートできるかを考えながら、その授業内容を検討してきた。内容を充実させるための手立てとして、武田他(2013)のように教職に就いた卒業生に聞き取り調査をすることも内容を充実させる上で効果的であると考える。昨年度の実践の振り返りとして、今年4月から教員になった卒業生に①教職実践演習の授業が学校現場でどのように役に立っているか ②大学で教育実習後に学んでおきたかったことは何かについて聴取した。

①に立っていること

「色々な先生や先輩の授業に対する考え方や授業の進め方は、自分が授業を作るときにとっても参考になっています。特に自分はアクティビティーのアイデアで行き詰まることが多いので、そういう時にこれまで記録したメモなどを見直し、提案されたやり方に自分のアイデアも加えて授業で実践しています。具体的な指導法をたくさん紹介していただいたことはとても役に立っています。」

②大学で学んでおきたかったこと

「4月から授業を自分一人でやっていく中で、このやり方で本当にいいのか、とても不安でした。自分の授業に少しでも自信を持つために大学での

授業でもっと模擬授業をしておけばよかったと思います。」

教育実習の事前指導で模擬授業は行っているが、教育実習で授業運営がうまくいかなかったことを振り返り、教職実践演習で再度模擬授業を組むことを今年度は検討していきたい。今後も卒業生の聞き取り調査を続けて、本科目の内容充実に努めたい。

この科目は、履修する学生が教員になることを前提としたものであるため、民間企業に就職が決まっている学生たちがこの科目をどのようにとらえるか、開講前はやや心配もあった。しかしながら、「自分は教師にはならないから」というような冷めた態度は一切見られず、苦労も多かった教職課程での学びの総括として、どの学生も熱心に授業に参加していた。この授業は教師を目指さない学生にとっても社会人としての生活を円滑にスタートさせるためのよい準備として機能することがわかった。

教職実践演習は教職課程の総仕上げとして教育実習後に開講されているが、学生たちは入学直後から教職課程の履修履歴を記録する履修カルテの記入を続けている。学年末には各学科の教職担当教員が履修カルテの記載内容から各学生の履修状況を確認し、コメントを書いている。今後、学生の資質能力向上のため、この履修カルテをより一層活用していくことも課題の一つである。

欧米文化学科には「英語科教職課程があったのでこの学科を選んだ」という学生が毎年入学してくる。先生になりたい、という夢を実現させるために学科では1年次からきめ細やかな指導を続けている。また、卒業後も学科教員は教員になった卒業生と連絡を取り合っており、教職課程の先輩後輩は在学中も卒業後もよい関係を持ち続けている。教員になった先輩は、在校生にとって身近なロールモデルであり、よき目標となっている。今後も「入って伸びる大学」を具現化できるような教職課程を目指して、学科として本科目のカリキュ

ラムをより充実させていきたい。

参考文献

石田雅近・臼井芳子（2011）「第1章 英語教育と教師教育
改革の動向 2. 教師教育改革 2.1 教職課程」石田雅近・
神保尚武・久村研・酒井志延（編）『英語教師の成長 求
められる専門性』大修館書店

梅津哲郎・近藤健一郎（2014）「教職必修科目「教職実践演
習」の取り組みをふりかえって」『北海道大学教職課程年
報 第4号』北海道大学大学院教育学研究院

武田明典・村瀬公胤・八木雅之・宮木昇・嶋崎政夫「教職
実践演習のカリキュラム開発 -初任教員のニーズ調査-」
『神田外語大学紀要第25号』神田外語大学

中央教育審議会（2006）「今後の教員養成・免許制度の在り
方について（答申）別添1 教職実践演習（仮称）につい
て（2006年7月11日）」

[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/
chukyo0/toushin/attach/1337016.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm)

2015年7月31日アクセス

津野治彦（2012）「教育実践演習必修化に向けた 試行段階
の取組」『教育実践研究第22集』上越教育大学学校教育実
践研究センター

（ひがし・ひとみ 聖学院大学人文学部欧米文化学
科准教授）